論文紹介

院内がん登録データを用いた分析
ーがんステージと自覚症状ー

中林 愛恵

島根大学医学部医学科地域医療政策学講座／同附属病院医療サービス課

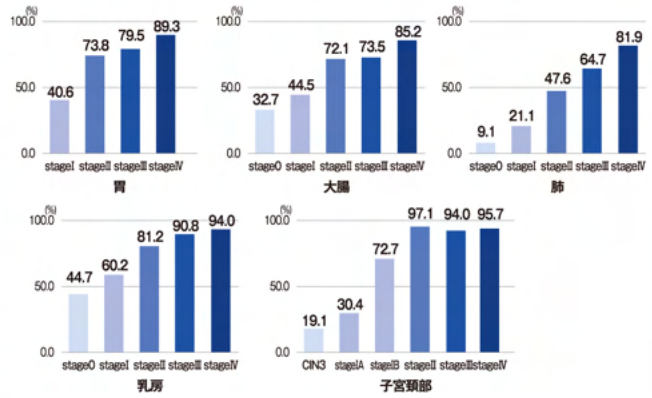
2018年5月にInternational Journal of Clinical Oncology誌に掲載された論文、How asymptomatic are early cancer patients of five organs based on registry data in Japanについてご紹介させていただきます。

早期がんは治癒が期待されるが無症状であると一般的に言われていますが、ステージの進行にしたがってどの程度自覚症状が出現するかは明らかではありません。そこで、がん登録データを用いてがん検診が行われている胃、大腸、肺、乳房、子宮頸部の5臓器において有症状率を検討しました。

対象は島根県が収集した県内13病院の2007年から2013年の院内がん登録データ18,405件で、院内がん登録標準登録様式2006年版の項目であった自覚症状の有無に着目し、診断時ステージ分布、ステージ毎の有症状率、そして、自覚症状有無による早期発見率を調査しました。

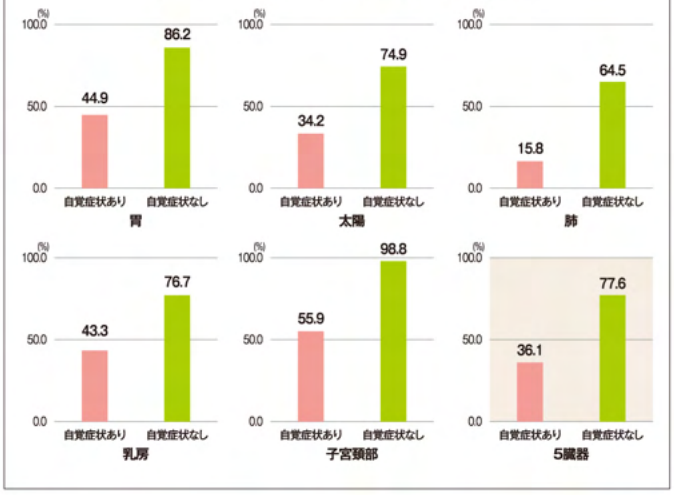
診断時ステージ分布に共通の傾向が見られ、ステージ0期およびI期をあわせた早期発見が最も進んでいたのは子宮頸部（全国*81.0%、島根83.5%）で、早期発見できていないのは肺（全国*43.4%、島根39.1%）でした。ステージ毎の有症状率からいずれの臓器もステージの進行につれて有症状率が高くなる傾向が見られました。胃がんと大腸がんは、ステージI期まで半数以上は無症状でした。肺がんはどのステージでも他の臓器より無症状の傾向がありました。乳がんは他の臓器よりは自覚症状があらわれる傾向がありますが、無症状の方もいらっしゃいました。子宮頸部がんは進行すると有症状の傾向がありますが、早期は無症状でした（図1）。↗

図1：ステージ毎有症状率



↘ 無症状症例の早期発見率は77.6%に対し、有症状症例の早期発見率は36.1%でした（図2）。自覚症状が出現してからの受診では、すでに進行してしまっている可能性があり、自覚症状がある場合は、ない場合に比べて早期発見率が低くなることを明示できました。有効性の確立したがん検診を実施しても、受診率が向上しないことにはがん死亡率の減少は達成できません。自覚症状がないうちに積極的にがん検診を受けるよう受診勧奨することが重要です。

図2：自覚症状有無による早期発見率



がん登録実務者としてがん登録室で勤務しているうちに、研究者や行政担当者の役に立ちたい、もっとがん登録データを活用したい、という思いが強くなってきました。そのために研究方法やデータ分析方法を学びたいと思い、大学院に入学しました。

文献検索や倫理委員会への申請、そして英語での論文執筆など、はじめて学ぶことばかりでしたが、本研究が学位審査で認められ、学位を取得することが出来ました。

今後もがん登録データを活用して研究を続け、せっかく集積されてきたがん登録データを社会に還元して行きたいです。最後に、データ提出にご協力いただいた島根県内院内がん登録実施施設の皆様、ご指導いただいた全ての皆様に感謝いたします。

*国立がん研究センター、がん診療連携拠点病院等院内がん登録2015年全国集計報告書より